国語方言学

琉球の方言

伊波普猷

國語科學講座

— VII —

國語方言學

琉球の方言

伊波普猷

株式會社
明治書院

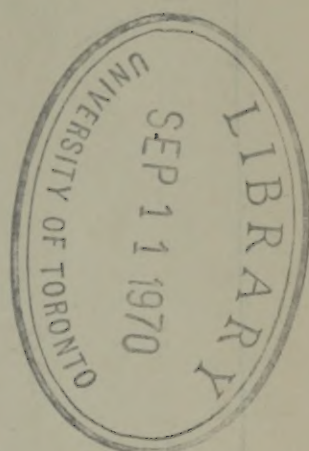
國語科學講座

— VII —

國語方言學

琉球の方言

伊波普猷

株式會社
明治書院

琉球の方言

伊波普猷

島や何處(ちや)の島も、變(かは)るげや無(ね)さめ。水に分(わ)かされて、言葉變る。（鬼界島の民謡）

一

「琉球方言」といふ名稱は、この頃一般に使用されるやうになつたが、いふまでもなく沖繩諸島及び島津氏の琉球入以前琉球王國の治下にあつた奄美大島諸島（但、土噶喇十島を除く）で行はれる言語のことで、南島語とも云つてゐるが、支那人は古くから之を琉球語と呼んでゐた。

西暦一七一九年（淸の康熙五十八年）、琉琉に使ひした册封副使徐葆光の中山傳信錄の琉球三十六島の章に、

琉球屬島三十六。水程南北三千里。東西六百里。遠近環列。各島語言。惟姑米葉壁。與中山爲近。餘皆不相通。擇其島能中山語者。給黃帽。令爲酋長。又遣黃帽官。涖治之。名奉行官。亦名監撫使。歲易人。土人稱之曰親雲上。聽其獄訟。徵其賦稅。小島各一員。馬齒山二員。太平山八重山大島各三員。惟巴麻（中山讀問字。音同麻。華言山也。下倣此。）伊計椅山硫磺山四島。不設員。諸島無文字。皆奉中山國書。我皇上聲敎遠布。各島漸通中國字。購畜中國書籍。有能讀上諭十六條。及能詩者矣。

と見えてゐる通り、五六百年この方、中山語即ち首里方言は、南島の公用語であつた。そして明の永樂頃（十五世紀の中葉）に編纂された華夷譯語以下明末から淸初にかけて編纂された數種の琉球寄語及び海東諸國記附載の語音翻譯（諺文で音譯された十六世紀中葉の琉球語）が、その採錄の經緯や內容によつて、首里方言であることも知れる。

因に言ふ。西曆一八一八年に、ロンドンで出版された Captain Basil Hall の Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island（朝鮮の西海岸及び大琉球島探險航海記）附載の海軍大尉 Herbert John Clifford 採集の一千餘の琉球單語と百十八の琉球短文とも等しく首里方言である。これは主として首里の眞榮平といふ官吏に材料を得たのであるが、音韻やアクセントで、それにはいくらか那覇方言の混入してゐることがわかる。これは恐らく歐洲に傳へられた琉球語の最初の見本であらう。それから、西曆一八五五年上海で上木された英國宣教師 Betellheim（伯德令）の琉球譯福音書（その原稿の伯林國立圖書館にあることは、京城大學の松平教授の語る所である）は、夙に Benfey の言語學史にも擧られたほど有名なもので、那覇方言で譯してあるが、所々に日本の文語が加味してある。譯者が讀んだ書籍の目錄中に、四書の俚諺抄があるのを見たら、思半ばに過ぐるものがあらう。彼は十二の國語に通じた程の語學の天才で、一八四六年から一八五四年迄九年間も那覇市に滯在したので、「その民に了解せらるゝ言語」を以て、能く說教などもしたとのことである。彼より二年前琉球に渡つて、彼と入違ひに琉球を去つた佛國宣教師の Forcade も亦琉球語に通じてゐた。その Le Journal de mgr. Forcade（フォルカード大司教の琉球日記）が、リオン市で發行された週間雜誌 Les Missions Catholiques に、一八八五年五月から同年十一月迄二十四回に亙つて連載されたが、その中に、琉球の役人たちは、最初の間極力自分の琉球語の研

究を防害し、うそを教へたり、からかつたり、わざと文語を教へたりなどしてゐたが、八ケ月前から寺院内の小役人が、急に態度を一變して、親切に教へてくれたので、昨今は肝腎な會話を筆記し得る迄に進歩し、しかも一萬語以上の辭書を作ることが出來て、話してゐることを聞きわけるに差支ないのみか、對話するにも左程困難を感じない位になつた。今朝などは那覇に寄港した英國船長との對話の通譯までしてやつた。といつたやうなことが見えてゐる。例の辭書がやはり那覇方言であることは、いふまでもない。又その頃、那覇に寄港した佛蘭西の士官達が、日本船見物に出かけた時、彼は通譯としてついていつたが、「日本語と琉球語とは、多少異なるやうだが、先方の言ふことも分るし、先方にも亦こちらの言ふことがわかる。彼等の態度は毫も反感的で無く、どちらかといへば親しみ易い方だ。喜んで談話を交へるし、こちらの質問にも答へてくれる、たゞ餘り深入りすると、聞えないふりして、分らないと答へる。尤もこの人達は單なる商人で、內心には些のこだはりもないのだが、小役人の一團が乘込んで來て、監視の目を向けるので、遠慮するわけだ」といつてゐる。この商人達が屢ゝ琉球にやつて來て、琉球語を解してゐたせいもあらうが、語學の才能のある外國人が、十三ケ月位琉球語をやつたばかりで、日本語が略ゝ分つたといふことは、兩言語の關係を考へる人に、よい暗示を與へるかも知れない。

少々横道に這入るが、所謂琉球三十六島について、數言を費す必要がある。この名稱は、詩人墨客の間で用ゐられるもので、琉歌にもさう書いて「みそむしま」と訓ませたのが一つあるが、その文獻に現れたのは、傳信錄に、

三十六島。前錄未見。惟張學禮記云。賜三十六姓。敎化三十六島。其島名物產則未之及也。今從國王所。請示地圖。王命紫金太夫程順則爲圖。徑丈有奇。東西南北。方位略定。然注三十六島土名而已。其水程之遠近。土產之磽瘠。有司受事之定制。則

倶未詳焉。葆光周諮博采。絲聯黍合。又與中山人士。反覆互定。今雖略見結準。恐舛漏尚多。加詳審定。請俟後之君子。

とある如く、清初の冊封正使張學禮の使錄に見られるのが最初で、その圖は琉球の碩儒程順則の指南廣義に載つたのを嚆矢とする。この三十六島は、三十六鱗・三十六物・三十六峯・三十六計・三十六英雄などと等しく、地數六六に因む支那人一流の文飾で、實際の數ではなく、程氏の作製した地圖も、東西南北の方位や水程の遠近がその當を得てゐない。弓張月を讀む時、沖繩本島内の地理が稍〻實際に卽してゐる割りに、島嶼間の方位や遠近にくるひがあるのは、馬琴が專らこの圖に據つて書いた爲である。

二

所謂三十六島で行はれてゐる言語は、原始國語から分岐したもので、國語の研究上輕視すべからざるものであるが、「古語は方言に殘る」といふ考へは、既に平安朝末期か鎌倉時代の初期頃から興つて、方言によつて古歌中の難語を解釋する事が出來たといふ逸話が、色々の歌學書中に現れ、この考へは、江戸時代に及んで、愈〻有力となつたに拘らず、琉球を異國視してゐた國學者達は、琉球が古語の寶庫であることに氣が付かなかつた。言語の問題に對して、流石に大なる見識を有し、しかも敏感であつた新井白石は、二回ほど琉球使節の一行に會つて、質問を試みたばかりであるのに、正しく琉球人を洞察して、その私簡中に、

抑倭歌は日本の本色のものに候。琉球人は南倭とて、此國と同じ地脉の國に候。故に名歌をもよみ出し候もの有之候。

といつてゐるが、惜しいことには、その言語に關する研究を彼はのこしてゐない。當時は琉球研究熱がおこりかけて

ゐた割りに、多くの學者は、明樂を奏して練り歩く、唐裝束の球球人によつて、たゞその異國趣味を滿足させたばかりで、南留別志の中に、「古の詞は多く田舎に殘れり」と書いた徂徠の如き碩學でさへ、その琉球聘使記に「今日の歡らしやや、何にぎやな譬る。莟で居る花の露行逢た如」といふお祝の時に謠ふ琉歌を、

結衞諸（華云希有）火骨刺沙喲（華云華奢）捺屋列割捺（華云有是哉）他鐵鹿（彩色具）子僕奕阿兒發捺諸（華云未開也）子由應藥他我多（華云如露一般）

と、まるきり反對の意味に解して怪しまなかつた。そして森島中良は之をその琉球談中に引用して「其歌は生者必滅の意を本とせり。いかさまにも挽歌めきたり」と註したが、それらを取入れた馬琴は、弓張月の中に、例の上の句と下の句とを顚倒して、

つぼてある。 花の露のみ。 **まやたごと。** **けなばや。** **たてろ。**

――つぼみある花のつゆの身といふことなり　――そのつゆをおびたるごとしとなり　――きえなばなり　――さいしきの具なりとぞ

そもなほれかな

――それもなほあらんかなといふ義なり

となし、之を毛鼎國が辭世の歌にして、「つらねたる歌は琉球語なり。（聘使記に註せられたり）つぼてある花の露の身まやたごとは、莟る花の露を帶たるごとき身なり、といふなり。けなばやたてろそもなほれかなとは、消なばその彩色もこれあらんや。人の命もしかなり、と無常を觀ずるこゝろ言葉の、和歌の句調とよく稱て、三十一文字となりぬるこそ殊勝なれ」と說明してゐる。

兎に角、この頃は琉球研究熱が高潮してゐたので、流石の馬琴はその頃までに發表されたあらゆる資料を自家藥籠

中のものにして、南島を舞臺とする例の歴史小說を書上げたが、能く調べて見ると、彼の材料になつた徳川時代の琉球物は、多くは支那人の著書わけても中山傳信錄からの孫引であつた。「わすれのこり」に、

天保十三年十一月、琉球人來朝ありたり。其節風邪大に流行せり。その時御救助米下されたり。是を琉球風邪といふ。落首、

琉球から風をくるまに積んで來て、引く人もあり、おすひともあり

といふことが見えてゐるが、百名內外の江戸上りの琉球人は、かうして病菌を撒きちらしたと同時に、琉球研究熱をも煽つたに違ひない。しかも徳川時代の末期に至るまで、琉球語の研究は遂に興らなかつた。たゞ考證學者の伴信友は、明末に支那人によつて採錄された音韻字海といふ琉球譯語を繙き、その假字本末中に、

天文地理等の釋語を載せたるに、その用字の音格詳ならず、讀得がたきものあれど、多くは皇國語なり、云々

と記して、琉球語が國語の方言であることをほのめかしたが、初めて之を具體的に言表した者は、明治初年の琉球處分の時、琉球に使ひした松田道之その人であつた。彼は首里城での談判の席上で、琉球が日本の版圖である證據の一として、人種・民俗及び言語の問題を持出してゐるが、その中にかういふことを述べてゐる。

人種風俗日淸兩國ニ類シ、言語ハ交通ノ繁キヲ以テ我國ニ近ク、故ニ何レノ國ニ因ルト定メ難シトノ論、是只一樣ノ見ナク、此琉球ノ人種タル、骨格體格我ガ薩摩人種ナリ。其風俗最モ多ク、就中我ガ古代ノ風趣アリ。然レドモ世ノ變遷ニ從ヒ、他ノ交際ニ依テ自然變遷スルモノアレバ、日淸兩國ノ風儀ヲ混同スルモノアリ。其言語ニ於ケル單語ニ至テハ、亦交際ニ因テ自然變遷スルモノアリト雖ドモ、我カ古言鎌倉言薩摩言多クシテ、僅々支那語ヲ交フ。元來此琉球人民ハ專ラ薩摩ト支那トノ間ニ往來シテ、常ニ內地ノ諸方ニ來ラズ。就中久米村ニ於テハ現ニ明ノ人種移住シタルモノナリ。然ルニ我國言多キノミナラズ、

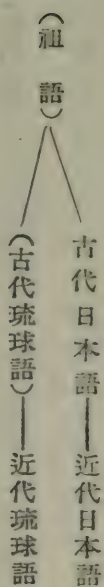
其古言ノ存スルハ則チ我ガ國ノ人種タル一證ナリ。語調語音語章ニ至ツテハ、交際ニ依テ自然變遷スルモノニアラズ。就中語調ニ至ツテハ、學ブト雖ドモ變移スルコトヲ得ズ。而シテ此琉球人民ノ語調ヲ聞クニ、純然我カ國ノ語調ニシテ、語音ハ薩摩ノ語音ナリ。語章（語法の義）ニ至ツテハ、名詞ヲ上ニ用ヒ、動詞ヲ下ニ用フルガ如キ、最モ著明ナル我ガ國語ノ證アリ。如此歷々タル四證アリ。故ニ地理人種風俗言語等ニ就キ論ズルモ、我ガ國ノ版圖ナリト謂フ所以ナリ。

これは實に明治七年のことであるが、琉球語の系統論が、語學者の口から出ないで、當時の外交官ともいふべき人の口から出たのは面白いことである。尤も德川時代の末期、既に和蘭文典の組織に據る鶴峯戊申の語學新書が世に出で、明治七年には、英文典の規矩に從つた田中義廉の小學日本文典も刊行されてゐたから、才人なる松田が、琉球問題解決の必要上、これらの文法書を讀み、その上學者の意見をも徵して、十分準備して出かけたことは、想像するに難くないが、これは從來餘り世に知られなかつた事實で、必要が學說を生むの母である一例であらう。

三

かうして、琉球語に對する認識は漸く深まつて來たが、之を言語學的に硏究して、國語との關係を闡明したのは、前揭琉球探驗記の著者 Captain Basil Hall の外孫 Basil Hall Chamberlain であつた。彼が明治六年、二十四歲にして來朝し、六十二歲最後に歸國するまで、約四十年間も、日本特に國語及び國文學の硏究に沒頭し、東京帝國大學に言語學と國語との講義を開始して、日本語の科學的硏究の興るべき基礎を築いたことは、人の能く知る所であるが、かうした硏究に志した動機の、幼にして祖父の著書を耽讀したことにあるとは、彼自らの語る所である。彼は明

治二十六年(一八九三年)、琉球に遊んで、親しく琉球を研究し、翌々年英國の The Geographical magazine (地學雜誌) の四號五號六號に、The Luchu Islands and their Inhabitants (琉球諸島及びその住民) といふ六十五頁の論文を揭げて、學界の注意を喚起したが、特に東京在住の琉球學生について琉球語を研究し、同年六月十二日、The Asiatic Society of Japan (日本亞細亞協會)で朗讀した、Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language (琉球文典及び語彙) を同協會の機關雜誌第二十三號の附錄として刊行した。そしてその中に、日本語と琉球語との系圖的關係(括弧中のものは、原本に斜體(イタリツク)を用ゐたもので、假設的の意を表す)を、

(祖　語) ┬ 古代日本語——近代日本語
　　　　 └ (古代琉球語)——近代琉球語

の如く圖示して、

兩國語の語法を具さに比較すると、語詞論(アクシデンス)に於ても、措辭論(シンタックス)に於ても、根本的一致の存することがわかる。——しかも其の一致たるや、目に付き易い細目の差異と共に、イスパニヤ語とイタリヤ語との間に存立する關係そつくりである。單語の場合も亦同樣である。もし兩國語の祖語なるものがあつたとしたら、日本語はその或る部分を、琉球語はその他の部分を、忠實に保存してゐる。——但、二三の特殊の點では、近代日本語が上代日本語を代表するよりも、琉球語のそれを代表することが、より忠實であるとさへ言へる。それは特に動詞の語尾變化に於いて著しい。つまりは、兩國語の相互的關係を、イスパニヤ語とイタリヤ語とのそれに、否むしろイスパニヤ語とフランス語とのそれに比較しても、大過はなからう。

と推論し、更に後者の分岐した時期や事情などについて、次の如く憶測を逞しうしてゐる。

吾々は、人皇第一代の神武天皇が、國の最西端から興つて、東征された、といふ傳說を信じてゐる。地圖を一瞥したら、日本の中で九州が亞細亞大陸に最接近した部分であることがわかるが、其の九州には、對島といふ小島が便利な飛石のやうに附いてゐる。この樂な路から、例の征服民族は、西曆三世紀前に、九州へ渡つたと見てい丶、——この世紀に支那史家に採錄された地理上その他の名稱等(註、邪馬臺國、一支國、末盧國、卑狗、卑奴母離、卑彌姑、狗古智卑狗等々を指す)には、まがひもなく日本的の響きがある。傳說の語る所によれば、侵入者達は恐らく九州を立つて、道を東北に取り、ゆく〱先住民族やさういつた團體を征服して、進軍したであらう。西曆八世紀頃に北緯四十度の邊まで進んでゐたこの植民の進行は、いまなほ繼續してゐる。蝦夷は今では日本人で一杯に塡まらうとしてゐるが、彼の先住民族の人口も、いまだに相當の數字を示してゐる。思ふに、例の大部隊が東北に移動しつ丶あつた間に、迷子になつた小數の落伍者や弱者だちは、南方で逍つてゐたに違ひない、——多分生存の競爭に負けて、南部九州の鹿兒島灣頭から、現今大琉球として知られてゐる所に梯子のきざはしのやうに連つてゐる島嶼へ、はる〲落延びて、その隱れ家を見出したのではあるまいか。歷史は中世紀頃これに似通つた落人の群の到着した事を語つてゐる。それより早い時代には同樣な事件が起らなかつた、とどうして言ひ得よう。人種や言語の近似については、これで簡單に說明がつくが、でもそれには、長い世代と遠隔な距離との爲に、著しい差異が生じてゐる。

かういつて、彼は琉球語を日本語の姉妹語(シスターランゲーヂ)だと斷定した。由來日本語の場合には、相似又は相異の第二の言語が無いと考へられ、從つてその孤立といふ事實は、日本語の研究を不確實不結果の者たらしめたが、今や玆にその姉妹語を與へられて、事情は一變せざるを得ない。この意味に於て、彼の功績は永久に記憶されるであらう。

なる程彼の研究は、首里語といふ限られた範圍內で行はれて、少しも他の方言には觸れてゐないから、比較研究上

好果を收むべき資料に乏しく、それに就いては、彼自身も、

此資料の幾分は、一八九三年(明治二十六年)に、親しく琉球で舊王都首里の敎養ある人達(沖繩對話の編纂者護得久朝常氏等)から、餘は、一八九四―五年に、東京に居合せた一人の敎育ある首里人(桃原良得といふ法律學生)から得たものである。試みに、後者の言葉を彼の鄕里の人達のと比較して見ると、何時でも完全に一致してゐるので、彼から得た材料は彼の地で採集したのと同價値だと考へていゝ。しかし首里の標準語と田舍特に北方の山原(ヤンバル)といふ山地の方言との間には、かなりの開きがあつて、後者には敎養ある上流社會では、とうの昔廢れて了つた純古琉球の單語・熟語及び語法などが、多く昔ながらの姿で生き殘つてゐる。同樣な事が久米島に就いてもいへる。其處では標準的琉球語の發音や單語が、一種の地方的訛りで話されてゐる。この種の調査は、より十分な時日と「困難」(ラツフイングイツト)(註、Mark Twain の作の名 "Roughing it" を借用したもの)に打勝つ元氣のある後の採訪家に委ねなければならない。

といつてゐるが、頃は琉球人の去就を決すべき日清戰爭の前後で、國語敎育が普及しなかつた爲に、國語の夥しい輸入で、琉球語が破產に頻してゐる現今とはまるで違つた、正確な琉球語の話されてゐた時代だけに、彼が蒐集した資料は、比較的價値の多いものと見ていゝ。たゞ惜しむべきは、今日と違つて、島嶼間の航海が非常に危險であつた爲に、半生を旅行家として送つた流石の彼も、宮古八重山の探險に踏出さなかつたことで、もしそれを敢てしたとしたら、そして山原方言よりも、或部分は古形を保存し、他の部分は遙に變化を遂げて、沖繩本島の人にさへ通じない方言に接したとしたら、彼の業蹟には、もつと見るべきものもあつたに違ひない。それから、

琉球滯在中に、漢字混りの假名書きの古民謠一卷と別に首里區長西常央氏所藏の珍寫本二冊とを見たが、縣知事の斡旋で、何

れも滯在中に寫して貰つた。後者は淸の康熙五十年（一七一一年）、王府の命に依つて編纂された特殊の廢語並に熟語の辭書（註、混効驗集一名内裏言葉のことで、乾坤二卷よりなる）で、前者はこれより一世紀も前のもので、西暦一六二三年の日附があるが、王家の祭祀の時に謠はれた古詩卽ち神歌（註、おもろさうしの三卷以下は、明の天啓三年西暦一六二三年に編纂されたもので、彼が見た一册の最後の二十二卷みおやだいりのおもろさうしといふ祭祀の時に用ゐられたものであることはいふまでもない）であるらしい。無論かうした校本の研究には、大なる困難が伴ふものだが、其上借り物の不適當な文字で表記された爲に、困難の度が倍加されてゐる。意義も發音も同樣に不正確で、この自稱探險家も、一歩每に足下の土が崩れ去るやうな思ひをしなければならない。兎に角今のところ、自分は該書に對して滿足な論文など發表する柄でないやうな氣がする。

といつてゐる通り、彼は琉球語の時代的考證にも指を染めることが出來なかつた。

では、言語の研究に最必要な比較研究と時代的考證とを拔きにした彼の研究は、全然價値が無いかと言ふに、決してさうではない。この三十年間、私は主として「おもろさうし」その他の琉球諸島の歌謠の研究に沒頭し、傍支那その他の文獻に現れた琉球語學資料を涉獵して、琉球語の時代的考證に腐心し、近來幾人かの青年學徒も、先島諸島及び奄美大島諸島の語彙を蒐集して、比較研究上の好果を收めつゝあるが、これらの光に照らして、Chamberlain の說を再吟味する時、枝葉の點では訂正されるべきものが多く、主なる點でも、原始國語三母音說の如きは、動搖を來たしたに拘らず、餘は大方裏書されつゝあるのを見て、私は今更のやうに、その炯眼に服し、メトロポール橋畔に餘生を送るこの言語學者を欽慕して已まないのである。

序に一つ附加へたいのは、琉球人自身が、自分達の言語について、どういふ考へを抱いてゐたかといふことである。

二百五十年前に琉球の政治を執つてゐた羽地王子向象賢は、その仕置の中に、

竊惟、此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候。然者末世之今に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり。雖然言葉の餘相違者、遠國之上久しく通融爲絶故也。五穀も人同時日本より爲渡物なれば、云々

と、Chamberlain と殆ど同樣なことを言つてゐる。そしてこの說は明治初年に至つて、琉球最後の政治家宜灣朝保によつて布衍された。宜灣は松風齋と號し、和漢の學に通じ、特に和歌は八田知紀の門下でも錚々の名があつたが、琉語解釋を著して、その緒言に向象賢の言を引用し「まことにさることとなるべし。古事記傳萬葉集など見るに、日本上古のことば爰には今も多く殘れり。今一二をあげて子弟等に示さんとかくはものしつる也」といつて、三十餘の單語を記紀萬葉中の古語と比較して解釋してゐる。この語彙にはイロハの見出しをおいて、皆餘白が存してあるから、稿本の中でも、着手始めのものであつたことが知れる。その寫本は、明治二十三四年頃、時の沖繩縣知事丸岡莞爾氏の編纂に係る琉球史料六十餘冊中にあつて、沖繩縣廳に保管されてゐたから、Chamberlain が目を通したとしたら、右二氏の言をどこかで紹介してゐる筈だのに、その論文のどこにも見出せないのを見ると、この大事な資料を見逃したに違ひない。といふのは、この史料中には例の「おもろさうし」二十二卷も這入つてゐるのに、その事にも一向觸れてゐないからだ。縣廳の役人達は、西洋人などにこんなものを見せても、讀める氣遣がない、と考へたのだらうか、わざ〳〵之を藏から持出して來て見せるやうなことはしなかつたらしい。その中には、右の寫本の外に、十六世紀の初葉から十七世紀の初葉に至る琉球文の金石文を收めた琉球國碑文集もあるが、彼は勿論それも見てゐない。この種の金石文のいくつかは、今尙首里城附近その他に立つてゐるが、當時は琉球人自身も、之を忘れてゐた時代だから、

之を知らしてくれた者が一人も居なかつたらしい。この頃は恩師田島利三郎先生も、沖繩中學で教鞭を執られて、傍オモロ・クヮイニャ琉歌・戲曲及び方言を研究して居られたが、どうしたのか、Chamberlain に會つて、意見を交換された形跡がない。この時もし二人の琉球語研究者が會つてゐたとしたら、Chamberlain の琉球文典は、もつと價値あるものになつてゐたに違ひない。

序に言つて置くが、例の琉球史料は、明治四十三年、縣立沖繩圖書館に移管されて、今では五千餘冊の郷土資料中に加へられてゐるので、南島の訪書家は、之を自由に利用し得るやうになつてゐる。

四

南島人の祖先が、西暦紀元三世紀前に、九州の一角から南島に移住した、といふ Chamberlain の論據は判然しないが、兎に角推古天皇の二十四年以來、南島人はしば〳〵日本々土を訪れたので、朝廷でも譯語(をさ)を置いて、相互の意見を通じたといつたやうなことが、日本書紀にほの見えてゐて、南島語がかなりの變化を遂げてゐたことがわかるから、この頃は分岐してからかなりの年月が立つてゐて、既に方言の域を脱してゐたやうな氣がする。あれからもう千四五百年以上も經過し、しかも交通不便な島嶼で、特殊の發達を遂げた故、所謂琉球方言を東北方言や九州方言などと比較して考へる時、そこには自ら親疎の別のあることを知らなければなるまい。

試みに、その民謡と方言との見本を紹介して見よう。まづ宮古島の民謡を萬國音標文字で轉寫して見るとかうだ。

（以下この稿では、この記號を用ゐることにする）

o: su nu pana kara Funi peraʃi ma:t mai ɡuriʃʃa: ŋjan ʏvata ɡa dzo: kiʃi, ʏva matsü ɡama nu du dukï ɡuri kaŧ.

これを私が不斷使つてゐる那覇の方言で譯してみると、かうなる。

o: ʃu kuruʃu nu 'wi: kara Funi haratʃi, ma: jusin kutsiko: ne: n. itta: dʒo: 'ndʒi, 'ja: matʃusi ɡa du juku nu kutsiʃaru.

琉球語の音韻法則を心得ず、Chamberlain の文法書を讀んだことのない人には、まるで外國語のやうに響くであらう。之を國語に直譯すると、青海原の上から船をやり、廻るのも苦しくはない、お前(達)の門に來て、お前を待つのが餘計苦しい、といふことになる。これで見ると、Chamberlain がいつたやうに、これらは國語の方言と呼ばれるには、餘りに變化し過ぎてゐるやうにも思へる。もしこの程度の開きのあるものを國語の方言と呼ぶならば、フランス語やイスパニヤ語やポルトガル語などのやうな獨立言語も、その國籍の如何に拘らず、どれか一つの方言と稱せられて、現在千五百もあると言はれる世界の獨立言語の數は、ずつと減少するに違ひない。しかし用語の適不適は暫らく問はずに置いて、以下少しく所謂琉球方言の音韻・單語及び語法等の重なる特徴について述べて見よう。

五

現代琉球語(即ち首里方言を中心とした沖繩島の方言)には、母音は〔a〕〔i〕〔u〕の三つあるだけで、〔e〕〔o〕の二つは缺けてゐる。だから、琉球人に取つては、所謂五十音圖中、エ列オ列の音節、特にその連續する語・句・文を發音するのは、

かなり困難である。その老人たちが、「日本(やまと)は五音、沖縄は三音」と言つてゐるのを見ると、彼等は〔a〕〔i〕〔u〕の三母音しか有つてゐないことを、とうに自覚してゐたことがわかる。Chamberlain も例の著書中に、琉球語には三個の基本母音があつて、それには長短の二種があり、中間母音の〔e〕〔o〕は、長母音としてのみ現れ、短母音の〔e〕は、唯一つ ha-beru(蝶)といふ語に存在する、といつてゐるが、その外に、une(あら)・ane(あれ)等の間投詞に現れ、ten・den・wen・men 等の如く、鼻音の前にも現れる。〔o〕の場合も之と略々同様であるといつてゐる。試みに、Manual for Christian Workers. Loo-choan Edition（私が十數年メソヂスト派の宣教師シュワルツ氏の依頼をうけて、新約聖書の一部を琉球語に譯したもので、約十六頁位のもの）中の母音の統計を取つて見ると

a ……………… 二、〇〇九
i ……………… 二、〇三九
u ……………… 二、〇六五
e ……………… 一三
o ……………… 〇
a: ……………… 三四九
i: ……………… 一六一
u: ……………… 一三六

e: ……………………………………一九一
o: ……………………………………一一六

となる。但、宮古八重山諸島の方言には、二重母音が有るが、沖繩方言では、それはとうの昔長母音に變じてゐるので、この統計中の〔e:〕が ai に相當し、〔o:〕が au に相當することは言ふまでもない。Bopp 等の原始三母音說にヒントを得た Chamberlain は、古代國語で、nu(野)・kugane (黃金)のやうに、古く〔u〕であつたものが、後世〔o〕と發音されたり、naga-iki(嘆)が nageki となり、tati-ari(立ちあり)が tateri となつたやうに、〔e〕が a+i 又は i+a から來たりした現象を見て Aston の原始國語三母音說に贊成してゐた矢先、偶々姉妹語なる琉球語を發見して、〔e〕〔o〕の缺けてゐることを知り、これがとりもなほさず祖語のすがたの生寫しだと斷定したが、數年前公にされた北里闌氏の日本古代語音組織考及び安藤正次氏の古代國語の研究にも之を祖述した意見が見えてゐる。よし原始國語の母音組織はさうであつたと假定しても、現代琉球語のそれを以て、直ちに之を證明するのは早計と言はなければならない。試みに、第二の萬葉集ともいふべきオモロの母音統計を取つて、萬葉のそれと比較して見よう。さしあたり拙著「おもろさうし選釋」中に出てゐるオモロ百首について統計を取ると、

a ……………………………………一、七五七
i ……………………………………一、〇四三
u ……………………………………六〇五
e ……………………………………七八二

o……………………一、三四五
o:……………………五七
e:……………………二

となつて、〔a〕〔o〕〔i〕〔e〕〔u〕の順序となる。それから、萬葉集卷一のそれは、

a……………………一、三二二
i……………………九四二
u……………………六四五
e……………………三三二
o……………………九九八

となつて、〔a〕〔o〕〔i〕〔u〕〔e〕の順序となる。(これは友人の手を煩はして、折口信夫氏の口譯萬葉集のゝを取つて貰つたのであるが、由來萬葉の訓み方には、一定しない所があるので、これと他の人が取つたものとの間に多少の出入があるのは、當然なことである。)それは兎に角、萬葉とオモロとの間に、かうして著しい類似があるのは、注意すべきことである。

現代琉球語には、エ列とオ列とが缺けてゐるのに、オモロを表記するに、エ列とオ列との假名を用ゐたのを變に思ふ人があるかも知れぬが、この疑問は、琉球語に於ける音韻變化の激しい現象を目撃したら自ら氷解するであらう。

現に沖繩島の北部の老人達の語音には、國語のエに當る〔i〕と在來の〔i〕との間に、いくらかの開きがあるといひ、首里方言でも、一世紀前までは、同樣な現象があつたといひ、田島先生も、三十年前に、首里那覇の老人達の語音には、國語のォに當る〔u〕と在來の〔u〕との間には幾分の開きがあるといつて居られたから、平假名を借用して、オモロを表記した當初(鎌倉期以前)には、その間にかなりはつきりした區別があつたに違ひない。そして國語の母音との間に、大した開きの無かつた時代の琉球人は、何等の苦心なしに自國語を表記し得て、彼等の子孫は、その後音韻が甚しく變化したに拘らず、この表記法を踏襲して近代に至つたと思はれる。それは華夷譯語中の琉球語の音譯と明史に現れた同時代の琉球人名の寫音法とが、オモロ及び金石文のそれと略ゝ一致し、それより一世紀後に出た語音翻譯の寫語法によつて、〔e〕と〔i〕との間に、又〔o〕と〔u〕との間に、開きの生じてゐたことが看取されるのでも知れる。かうした文獻學的考證の一端は、金澤博士還暦記念『東洋語の研究』に出した語音翻譯釋義の序説に述べて置いたから、詳しくは近々發表する華夷譯語の研究に讓ることにして、こゝでは南島の七方言の比較によつて闡明した、琉球語に於ける口蓋化の法則を紹介しながら、この問題に觸れることにしよう

現代琉球語では、〔e〕は〔i〕に〔o〕は〔u〕に合併し、從つて五十音圖中、エ列はイ列にオ列はウ列に合併して、しかもエ列から來た子音が原價を保存するに反して、在來のィ列の子音は口蓋化(若しくは濕音化)するので、さうしたところに、今は區別し難くなつてゐるこの兩母音の間に、かつて幾分開きのあつた痕跡がほの見えてゐる。即ち「k+i」(ki: 毛)、「g+i」(ka:gi 影又は姿)、「s+i」(karasi 貸せ)、「w+i」(wi:jun 醉ふ)、「n+i」(nni 胸)、「r+i」(turi 取れ)等に對して、「tʃ+i」(tʃin 着物)、「dʒ+i」(kadʒiri 限り)、「ʃ+i」(karaʃi 貸し)、「jijun」(坐る)、「n+i」(nijun 似

る又は煮る)、「j+i」(tuji 取り)等がある。(但、〔ri〕が〔ji〕に變ずるのは、殆ど語間にある場合である。)ところが、宮古・八重山の方言では、〔e〕が〔i〕になつた爲に、在來の〔i〕は自然〔ï〕(〔i〕と〔u〕との中間音で、東北方言にもあるが、ロシヤ語の〔bl〕と全く同じもの)に變じ、從つて双方の對立があるので、右の場合のやうな口蓋化の現象は見られない。卽ち、「k+i」(ki: 毛)、「g+i」(pigi 鬚)、「p+i」(pi: 屁)、「b+i」(kubi 壁)・「m+i」(imi 夢)・「r+i」(kuri 是)等に對して、「k+ï」(kïn 着物)、(g+ï」(ŋgï 右)、「p+ï」(pï 火)、「b+ï」(kubï 首)、「m+ï」(imï 忌)、「r+ï」(irï 錐)等がある。この例は宮古方言に取つたが、八重山方言のも大同小異である。

それから、沖繩方言では、オ列から來たウ列の子音も亦口蓋化する。卽ち、「k+u」(kunudʒu: 此の中、mu:ku 聟)、「g+u」(kunuguru 此頃)、「s+u」(sun 損)、「m+u」(mumu 桃又は股)、「n+u」(ʃinudʒun 凌ぐ)、「r+u」(kuruʃun 殺す)等に對して、「tʃ+u」(tʃu:n 來る、itʃun 行く)、「dʒ+u」(ku:dʒun 漕ぐ)、「ʃ+u」(ʃun 爲る)、「nj+u」(sinjun→sinun 濟む)、「n+u」(sinun 死ぬ)、「j+u」(tujun→tujin 取る)等がある。(但、〔ru〕が〔ju〕に變ずるのは、語間にある場合に限る。)これらの例は、大方語間にある場合で、語頭にある場合は混同を免れない。

宮古方言では、〔o〕から來た〔u〕に對して、一方には〔u〕があり、他方にはそれから轉訛した〔ü〕(支那語の白・子・四及び東京語のツ・ス・ヅの場合の變的ウと同樣のもの)があり、更に〔i〕に轉訛したものもあつて、三者共にオ列から來た tsu・dzu・su に對立してゐるが、〔ü〕は現今ではその他の子音の場合には殆ど現れず、しかもさうした場合に、口蓋化が起らないので、兩列の區別は殆ど出來なくなつてゐる。思ふに、八重山方言にもかつて同樣な音韻現象があつたであらう。現今では、沖繩方言のツ・スも「ts+i」(tsitʃi 月)、「s+i」(sipujun 吸ふ)になつてゐるが、これなども、

一旦「ts+'ü」、「s+ü」を經て、さうなつたに違ひない。

大島及び徳之島の方言でも、やはり〔i〕〔ï〕の兩形が對立してゐるので、たとひ〔e〕が〔ï〕(kï: 毛、tï: 手、nïmbjuri 眠る――大島）となつて、〔i〕が〔i〕(kin 着物、kikjuri 聞く、nirjuri 似る――同上）のまゝで止まる點は、宮古八重山のそれとあべこべになつてゐても、口蓋化の現象の餘り見られないのは、宮古八重山と同樣である。但、大島方言では、オ列から來た〔u〕と在來の〔u〕とは、語間にある場合には、大方口蓋化するので、兩者の區別はつくが、語頭に來る場合には、kutʃi（東風）、kutʃi（口）といつたやうに、(尤もアクセントで區別はしてゐるが)、殆ど區別し難くなつてゐる。之に反して、徳之島方言では、語間にある場合は無論のこと、語頭に來る場合にも、後者を無氣音化することによつて、前者と區別するやうになつてゐる。この方言でも亦在來の〔u〕は〔ts〕〔s〕の次に來る場合には、宮古方言同樣に、〔ü〕に變じてゐる。例へば、kasü（糟）、sü（巣）、sümа（角力）、tsüki（月）の如きものである。そして「鶴」を'tsuru（左肩に〔'〕を附したのは無氣音の印）又は tsiru といつてゐる地方もあるから、そこでもやはり宮古島同樣に、在來の〔u〕は、一方ではその儘で止まり他方では〔ü〕を經て、〔i〕に推移したことがわかる。

それから、兩形の對立してゐない鬼界及び沖永良部の方言にも、沖繩方言と等しく、口蓋化の現象があり、就中鬼界方言では、口蓋化しない場合には、オ列から來た「k+u」「t+u」等の子音が、ku'kuru（心）、tu'tʃi（時）といつたやうに、原價を保存するに反して、在來のゥ列の「k+u」「t+u」等の子音は、'ku'tʃi（口）、'tu'tʃi（月）といつたやうに、無氣音化し、同樣にエ列から來た「k+i」「t+i」等の子音が、ki'ta（桁）、ti:（手）といつたやうに、原價を保存するに反して、在來のイ列の「k+i」「t+i」等の子音は、'kidu（傷――小野津）、tʃidu（傷――早町）といつたやうに、

口蓋化しなければ、無氣音化するので、兩列の混同が避けられてゐる。但、語間にある場合の破裂音は、悉く無氣音化するので、多少の混同は免れないが、語頭に來る場合には、殆ど全くそんなことはないといつてゐゝ。この有氣無氣の區別は、沖繩方言にも見られる。那覇方言では、tʰi:(手)は支那語の「提」などと同樣な有氣音で、ti:(一ツ)は「地」と同樣な無氣音である。が、今ではこの無氣音は、僅に〔t〕〔k〕〔tʃ〕に見られるのみで、左程重要視されてゐるのではない。有氣無氣の區別の最もやかましい所は、沖繩島の北部で、其處では鬼界島に劣らず重要視されてゐて、この區別を誤れば、意味の通じない場合が多い。ところが那覇市から一里しか離れてゐない首里の城下には、この無氣音が無く、首里人は之を聞き分ける事さへ出來ない。

この外にも、鬼界方言には、エ列から來た「k+i」が hibuʃi(煙)といつたやうに、「h+i」に變ずる場合もあるが、かうして〔k〕が〔h〕に變ずる例は、沖繩島の北部及び沖永良部の方言にも見られるが、宮古八重山の方言では、これが更に〔f〕に變じてゐる。

以上述べたことで明白だが、〔e〕が〔i〕に〔o〕が〔u〕に合併した爲に、鬼界方言が種々の方法で、同音異義の語の混同を殆ど完全に防いでゐることは、南島語中、絕えてその比を見ない所で、親しく南島の重なる島々を訪れ、その音韻現象を見て、私の潛在意識中に溫醸しつゝあつた口蓋化の法則は、昭和四年の夏、最後に鬼界島を訪れるに及んで、漸く「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」(國語と國文學昭和五年八月號所載)の形を取つて現れ、昭和七年の冬、「語音翻譯釋義」によつて根據づけられたのである。要するにこれら七方言の音韻の比較によつて、たとひ多少の例外はあるにせよ、それらは大方類推で說明することが出來るから、南島方言に於ける音韻推移の法則(ラウトフエルシーブングゲゼッツ)は成立するわけである。

ところが最近私は九州大學の吉町義雄氏から御書面を頂いて、少からず驚かされてゐる。實は來年早々雜誌「方言」で、琉球語特輯號を出すことになつて、氏にPolivanov 教授のСравнительно-фонетическій очеркъ Японскаго и рюкюскаго Языковъ（日琉比較音韻論）の翻譯をお願ひしたら、早速快諾されて、翻譯を始められたが、おつつけこの論文は Chamberlain の原始三母音韻を反駁して、鄙説と同樣な口蓋化の説を唱へたものであることを知らして下さつた。氏は同じことを天草夏期講座の九州方言概説でも述べて居られるから、左に之を引用することにしよう。

琉球語には元來[a][i][u]の三母音しかなかつた。それが[a][i][u][e][o]の五母音韻になつたのだと説かれて來たのが、從來の見解であつたのです。Chamberlain 氏の如きも、この説を繼承して、それを一般に紹介したのでした。ところが近年それと反對に、最初は五母音[a][i][u][e][o]であつたのが、三母音[a][i][u]に統一されて了つたのだ、と全然反對説を唱へ出して來たのです。かうして五母音から三母音に減じて行つた、と發表された方が伊波普猷氏であります。伊波氏の口蓋化の法則は、今日新説として、學界に注目されて居ります。ところが、大變面白い事には、伊波氏がこの新説を發表される十年も以前に、一ロシヤ人の手により、日琉比較音聲論といふ書が公にされてゐることであります。どんな性質の書かと申しますと、やはり伊波氏の三母音統一論を説いてゐるのであります。これはポリヷーノフといふ人で、一九一四年、この書を發表したものです。僅か十八頁餘のものでありますが、かうした卓説が、十年も以前に一露人の手によつて發表されてゐることに、實に面白いと思ひます。

當時彼は琉球の島々を廻り、首里や八重山などを探遊したといはれて居ます。

之を讀んで、私は Polivanov 教授の慧眼に服するのであるが、もし Chamberlain 氏も、あの時宮古八重山に遊んで、その音韻現象を瞥見したとしたら、多分その原始三母音説の發表を見合せたに違ひない、と思つてゐる。

序に、今一つ琉球方言の音聲の新研究を紹介して置かう。最近航空研究所の小幡重一博士から送られた「琉球語・アイヌ語及びマレイ語の母音及び子音の性質」（日本數學物理學會誌第七卷第二號別刷）といふ論文は、この三種の言語の音響的差違を調べて、標準日本語及び朝鮮語と比較したのであるが、こゝには必要上、〔a〕〔i〕〔u〕の三母音についての實驗の結果だけを引用する。

〔a〕　琉球語〔a〕に於ては、低い方の二ツのフォルマント即ちF1 F2の隔りが、日本語「ア」の場合に比して遙に廣い。これ琉球語の〔a〕は日本語の「ア」に比して、音聲學的に「狭」い母音である、と言はれる原因であらう。

〔i〕　琉球語の〔i〕は、日本語の「イ」と明に音色を異にし、その高い方のフォルマントは、日本語の場合より振動數（ヘルツ）300程低い。

〔u〕　琉球語の〔u〕の音色の、日本語の「ウ」と相違するといふ事は、豫て知られて居る所であるが、このフォルマントの圖を一瞥すれば、それが日本語の「ウ」と「オ」との中間の音である事が認められる。

私の聽覺印象も、この實驗の結果と略〻同樣である。〔a〕については別に言ふべきことは無いが、〔i〕〔u〕に就いては、少しく說明を加へなければならない。服部四郎氏も、首里人の〔i〕は標準語のそれよりも低いといつてゐられたが、これは一世紀前までは、〔e〕から來た〔i〕と在來の〔i〕との間に、いくらかの開きがあつたのが、近代になつて、後者が前者に歩み寄つた事を語るもので、イ列の〔ṅi〕（國語の「ニ」と同じもの）が、七十臺以下の人達の語音から消えて、エ列から來た〔ṅi〕に合併したのと同じ現象と見ていゝ。それから、田島先生は、日清戰役の頃まで、老人達の語音中には、國語の「オ」に當る〔u〕と本來の〔u〕との間には、多少の開きがあるといはれてゐたが、後者も亦前者と相重なつて、影を隱して了つたことが知れる。初めて琉球人に接する人が、この〔u〕を聞き取ることが困難なのを見ても、その「オ」と「ウ」と

の中間音であることが窺はれる。

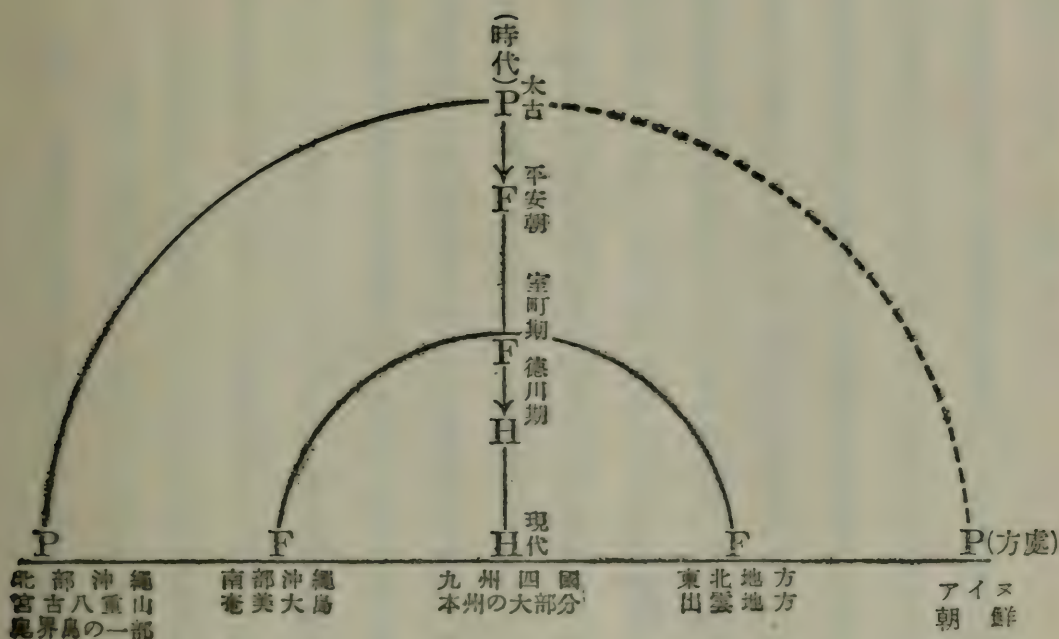
これで見ても、この數百年間に、〔e〕〔o〕がそれぐ〵〔i〕〔u〕に歩み寄つたことが知れよう。そして遂に相重なつて、同音異義の語が倍加した時、在來のイ列ウ列の子音が口蓋化して、漸く混同の防がれたことは、もはや疑ふ餘地がない。Chamberlain の說の如く、萬一南島語に最初から〔e〕〔o〕がなかつたとしたら、沖繩・沖永良部及び鬼界の三方言で、國語の「キ」に相當する音節の子音〔tʃ〕等が、どうしてさうなつたかを說明するに困難を感ずるのみならず、大島德之島及び兩先島の四方言に於ける〔i〕〔ï〕の對立(殆ど消えかゝつてはゐるが〔o〕〔ü〕の對立)を說明するにも、等しく困難を感ずるに違ひない。なるほど琉球語は、原始國語から分立したもので、Chamberlain も言つてゐるやうに、二三の特殊の點では、近代日本語が上代日本語を代表するよりも、より忠實であるとはいへ、その母音組織に祖語の俤を見出さうとする人は、見事に裏切られて、琉球語は國語よりも、この大切な點では、保守的でないことを發見するであらう。

この問題に關して、言語學史は、よき理解を助けてくれる。「印歐語に於ける口蓋化法則(palatal law)の發見は、結果として從來のやうに、サンスクリットを印度日耳曼語族中の最古にして完全な言語として見做すことの誤なることを示し、サンスクリットよりは寧ろ希臘或は羅典語を或點では一層顧るべき必要を痛感させ、言語學界に大きな革命を起したこととなつた。この法則を約めて言ふと、サンスクリットにあつて〔k〕〔g〕が保存されてゐる場合といふのは、この子音の次に母音〔a〕が來て、この〔a〕が希臘または羅典語の〔o〕に適應してゐた時である。之に反しサンスクリットが〔c〕(チ)〔j〕(ヂ)をもつ場合は、この子音の次の母音〔a〕が希臘または羅典語の母音〔e〕に適應してゐる時である。即ち、

kの例　Sanskrit kakša = Latin coxa

c の例　Sanskrit ca̱ = Greek te̱ = Latin que̱

これらの例から推斷すると、サンスクリットも元は〔a〕でなく、〔e〕や〔o〕をもつてゐたこと、〔e〕の前の〔k〕〔g〕は口蓋化されたことがわかる。サンスクリットの有してゐる母音〔a〕は、必ずや〔e〕と〔o〕の二つから發達して來たものに相違ない。〔a〕の原始形はサンスクリットでは消滅して、僅かに希臘語と羅典語に保されてゐるものと見做されなければならぬこととなる。して見れば、サンスクリットは希臘・羅典語よりは或大切な點では保守的でないこととなり、これが印度日耳曼語族に關する從來の學說を修正することとなつた。」（本講座小林淳男氏述「言語學史」）これは實に琉球語の場合と符を合すやうである。しかも琉球語の場合には、他の方言等と比較し得るだけでも澤山だのに、更にその古形を知るべき內外の文獻があるから、一層確實性を有することはいふまでもない。

終りに附加へて置きたいのは、かうして在來のイ列の子音に口蓋化が起つた後に、その類推によつて、更にエ列又はオ列から來たもの、さてはア列のものにも、餘計な口蓋化の起つたことである。鬼界方言で、この種の混亂を無氣音化といふ巧妙な方法で防いでゐることは、既に述べたが、かうした言語の疾病に對して、之を他語に言換へるといつた應急手當を施さないで、音樂的要素を用ゐて、之を生かしながら區別してゐることを知らなければならない。これは漢語の輸入などが無く、語彙が貧弱であつた古代には、より必要であつたに違ひない。さて、この音樂要素中のアクセントについても述べなければならないが、さういふ問題の取扱ひは、至つて不得手の方だから、それは雜誌「方言」所載服部四郎氏の「琉球語と國語との音韻法則」を見て頂くことにして、こゝでは波行の古音の問題に、一寸觸れて置かうと思ふ。

三十幾年か前に、上田博士がＰ音考の形式で、波行原音考を提唱されて、ハヒフヘホの古音はパピプペポであると說かれた時、國學者達は皇室の遠つみ祖のヒコホホデミノミコトをピコポポデミノミコトと申上げるのは不敬であるといつて騷いだばかりでなく、二三の學者の反對論も出たが、この說はその後橋本進吉氏のＰＦ變遷の時代的考證と新村博士のＦＨ變遷の時代的考證とを經て、十分に裏書きされた。私も亦南島諸方言にＰＦＨの配列されてゐる現狀を調査して、資料を提供したことがあつた。今之を手取り早く說明する爲に、簡單な圖を出して見る。試みに、縱の線を引いて、時代を表し、上端を太古として、Ｐを記し、平安朝に下つて、それがＦとなり、室町期から德川期にかけて、更にＨに變り、それが現代に至つたことを示す。そしてこの線と直角に、左右に橫の線を引いて、方處を表し、左端を沖繩島の北半・宮古八重山及び鬼界島の手久津久として、そこにＰを記し、それと中央との間を沖繩島の南半

及び奄美大島として、Fを記す。又右端を奥羽及び出雲と見て、そこにもFを記す。それから、二線の接觸點を中心として、コムパスで二つの弧を畫いて、兩端のPと上端のPとを連絡させ、橫線の二つのFと縱の線のFとを連絡させると、左方の南島方言に、國語三千年の歷史の橫斷面が現れて來る。二三の例を擧げると、「葉」「大」「多」は、北部沖繩と兩先島とでは、pa:・upu・upuku で、南部沖繩と奄美大島とでは、Fa:・uFu・uFuku である。近代になつて、FがHに遷りつゝある南部沖繩でさへ、「吸ふ」はいまだに supujun→sipujun、「鹽辛し」は ʃipukarasa で、昔ながらの發音を保存してゐる。この外にもまだ一二あるが、華夷譯語や語音翻譯を繙くと、今日Fになつてゐる語で、當時Pであつたのが、なほいくつかある。仲宗根政善學士は、北部沖繩にはPFの中間音があるといつて居り、私も鬼界島の手久津久附近で、それを聞いたことがあるから、PFHもこの數百年間に、漸次的に推移したと思はれる。世にはPFが原始國語時代から併立共存してゐたと主張する學者があるが、Fを有つてゐない北部沖繩の人たちが、「那覇」(naFa)等の如きFを有する固有名詞を發音するに際して、その持合せのH(Kの代用)を以てせずして、Pを以てするのを見たら、思半ばに過ぐるものがあらう。これは現に角波行の古音がPであるといふ說を否定する論者を狼狽させる有力な例で、この點では、琉球方言は最も保守的だといへる。序に言ふが、也行のイ(ji)エ(je)、和行のヰ(wi)ワ(wu)ヱ(we)ヲ(wo)、多行の〔ti〕〔tu〕、その濁音の〔di〕〔du〕なども、恐らく古音の保存されたものであらう。

上圖は、單にPFHの配列を示したまでで、その他の音韻又は單語語法等の場合もこれと同樣であると早斷するわけにはいかないが、親しく海南諸島を跋涉して調査した結果、その民俗がこれと並行して存在するのは、確かに注意に値ひする。

六

單語には隨分古語が殘つてゐる。それらは「方言」所載の琉球語彙中にも出して置いたから、こゝには數語を紹介するにとゞめる。國語のうはなり(後妻)・こなみ(前妻)は、そこでは ’wa:naji・kwa:naji に轉訛してゐる。前者は獨單に用ゐられてゐるが、後者は ’wa:naji kwa:naji と熟語的に用ゐられてゐるだけである。二語は語尾の形が類似してゐる爲に、一見、「うはなり」「こなみ」より古いと思ふ人があるかも知れぬが、kwa:naji は「こなみ」が「うはなり」の類推で、「こはなり」となり、轉訛してさうなつたもので、かうした例は外にもなほいくつかある。wa:naji は、國語同様に、嫉妬の義にも用ゐられてゐる。「いりほが」といふ古語には、和歌などを作るに意匠の餘り入り過ぎることとか考證理說の穿鑿に過ぎることとかいふ意があるが、琉球方言では、それが iriFugaʃun と活用して、錐などで穴をあけて下まで通すの義になつてゐる。單にもむ即ち錐で穴をあけるには、ijun(いる)といふが、その運用形に Fugaʃun がついて、複合動詞になると、さういふ意味が生ずる。「ほがす」は鹿兒島その他の方言にもあつて、かなり分布の廣い語であるが、琉球方言では、その自動詞は Fugijun で、穴のあくことには Fugi といひ、穴のあいたものには Fugimun といつてゐる。そして文久錢には mi:Fuga: といつてゐるが、これには穴のあいた錢の義がある。して見ると、大青海に「いりほがはいりおがと發音する語ならん」とあるのは、いりほがと言はなければならない。鬼界方言に、「山なッすん波」といふ言ひあらはしがあるが、「山なす波」即ち山の如き波の義である。この「なッすん」(連體形)に似た沖繩方言は ne:(←nai)で、常に動詞の終止形について、ne:nu jujun ne:ʃun(地震(なゐ)がゆるやう

だ）といつたやうに使はれてゐる。この ne: は ne:bi（眞似）とも緣を引いた語で、それには nijun（似る）の義があるやうだから、鹿持が、「なす」（如）と「似る」とは關係があるといつたのは、確に傾聽に値ひする。東條操氏はかつて「方言研究と方言文學」といふ論文の中に、

必至里。昔者此村在二海之洲一……海中洲者隼人俗語云二必至一（大隅風土記）

必至は恐らく「干瀬」であらう。今日の琉球語でも暗礁を「ヒシ」と云つてゐる。地名の中には古い方言が殘つてゐるから、地名から古い方言を還元する事は面白い研究だと思ふ。

と言はれたが、實にその通りである。しかし干瀬（Fiʃi）を暗礁と譯しては、十分その意を盡したとはいへない。暗礁にはヒシもあり、ヒシでないものもあり、ヒシになりかゝつてゐるのもある。ヒシは兎に角退き潮の時、水面に顯れるものである。さうかといつて、頭や肩や背中のやうな形のものが、一寸出てゐても、ヒシとは云ひにくい。板などが浮上つたやうになつて、かなり廣い範圍に擴がつてゐるものでなければならない。これは「海中洲隼人俗語云二必至一」に能くあたる。でも、沖に横はつてゐるものばかりでなく、陸地に繋がつてゐるのも、やはりさういつてゐる。そしてその方がヒシの大部分である。南の島々が出現してから、今日に至るまで、目に見えぬ珊瑚蟲は、人知れず造化の下働きとなつて、國土擴張の事業に從事してゐるが、彼等が創造したヒシは、至る所の諸々沖にあつて、その風光を一入佳にしてゐる。ヒシもだん／＼隆起して、海水に浸らなくなると、もう陸地の一部に繰込まれたり、小島になつたりして、ヒシとは云はれなくなるが、沖つ小島には、海水には少しも浸らないのに、何々ヒシといふ固有名詞に、その名殘りをとゞめてゐるのがまゝある。必至の里の如きもその一であらう。ヒシの表面は遠くから眺めると、

滑かなやうでも、近づいて見ると、多くは菊石（あばた）のやうな恰好をしてゐて、その凸凹の所には、細螺（しただみ）(琉球方言 ʃitʃadan)などが無數にたかつてゐる。古事記中に出てゐる神武天皇の御歌、

神風の伊勢の海の、意斐志（おひし）に、蔓延廻（はひもとほろ）ふ細螺（しただみ）の、い蔓延廻り、撃ちてし止まむ。

の意斐志（おひし）を、本居翁は大石と解されたが、これも大干瀬（おほひし）の義と解するのが穩當ではあるまいか。これなども日本々土では意味のわからなくなつた語の、琉球語に保存されてゐる例であらう。「だむ」といふ古語には、彩（だ）む又は著色するの義があつて、著聞集に「源氏のゑ、十卷だみたる料紙に書きて」と見えてゐて、その複合語には、だみうるし（彩漆）、だみゑ(彩畫)等が遺つてゐるが、この語も亦琉球方言には、damijun といふ形で保存されてゐて、多くは田舍で使はれてゐる。泥を塗るの義があるが、畫く義にも、漆器などに模樣をつける義にも轉じ、隈を取る意にも用ゐられてゐる。琉球演劇の隈の取り方も、歌舞伎のそれに似通つてゐて、多分に歌舞伎の影響を受けてゐると思はれるが、その時「くま」といふ用語を拜借しないで、之をダミに飜譯して使用した所に、琉球演劇の獨自性が窺はれる。多分古くから村芝居などで、にらひの大ぬし(遠來神)に扮する役者の顏に泥などをぬるのをさういつてゐたに違ひない。

以上は古語の遺つた例であるが、そこには又鎌倉時代から室町時代にかけて這入つた國語もかなりある。橋本進吉氏の吉利支丹教義の研究中に「ようじよ」といふ語が出てゐる。氏は原本の八九頁—九〇頁に「其の上夫婦互に一身の如く、思ひ合ひ、ようじよあらん時、力を添へ合はんが爲なり」「其の外何たるようじよあらん時も、互に便となる事あるべからず」の「ようじよ」を、卷末の日葡辭典によつて、「用事」と同義と思はれるといひ、我國の辭書には全く見えないが、實例としては、高麗陣捷に、「一里〱にはやみち二人つゝをき候て名護屋と大阪の用所早速相叶やう可有

之」とあるのと、萬治二年版の百物語巻上(二十二)に、「ある人のつかひし者に、きやうかるうつけありけるが、大雪のふりける折ふし、用所ありてつかひにやるに彼もの申すやう」とあるのを見ただけである、といつて居られる。この用所が ju:dʒu といふ形で、南島のあらゆる方言で、用事の意に使はれてゐるのは、注意すべきことである。今一つ同書に、「にんじゆ」(人數)は「人達」「人々」の意味で、現在の「人數」とは別義である、と見えてゐるが、これなどもそこではあらゆる方言で、いまだに「人達」「人々」の意味で使はれてゐる。組踊(戯曲)に、「揃て居る人數、出やうれ〳〵」とある人數は人々の義で、口語で能く使ふ「幾人人數」は、有數の人々の意である。但、現代國語の「人數」の義に用ゐられることもある。それから混効驗集に、「ばし、杯の心か。又のつこいと云ふ言葉にもかなふにや。和歌にも、えたりとてじまんばしすな數寄の道寸善尺魔ものごとにあり、と茶道の書にみえたり」とあるが、二百二十三年既に耳遠くなつてゐたことがわかる。けれども同じ頃に出來た組踊孝行之巻には、「母と思弟や氣遣ばしするな」と見え、その後に出來た大川敵討にも、「慾惡な谷釜巧で居る事の便りばしと思て」と見えてゐる。これは現今の沖縄方言には見出せないが、鬼界方言では、今でも「雨ばし降らんば」といつたやうに用ゐられてゐる。この助詞の用法には、室町期のそれに似通つた所がある。因にいふ。この助詞は肥筑方言にも遺つてゐる。

以上は僅の例であるが、これだけでも室町期に於ける本土と南島との交渉の密接であつたことが能く窺はれる。これらの單語が一旦南島の標準語なる首里語に這入つて、漸次各方言に傳播したことはいふまでもない。その傳播の跡を辿るには、まづこの標準語の出來た經緯を歴史的に瞥見する必要がある。西暦一一八七年から同一四〇五年までの二百十九年間、琉球に君臨した、舜天・英祖・察度等は、何れも浦添から興つたから、浦添方言の首里語に及ぼした影

響を念頭に置かなければなるまい。浦添はオモロに「うらおそひ」と書き、金石文には浦襲と漢譯してあつて、首里以前の國都に擬せられる所である。それから西暦一四〇五年より同一四八七年迄の六十五年間、首里に都した第一尙氏の發祥地佐敷(南部沖繩の東隅)の方言の、首里語に及ぼした影響も輕視すべきではない。早い話が、最保守的だと言はれるアクセントの點から見て、同方言が首里市の周圍の方言のそれよりも、甚しく首里語のそれに近いのは、注目すべきである。なほ又、第一尙氏を亡ぼして王朝を一新した、第二尙氏の第三世尙眞王の中央集權によつて、各邑落から「首里親國」(首都の義)に移住させられた「百按司」(諸侯の義)の方言の影響なども看過してはならない。首里語はつまりは各方言から單語その他を攝取して、肥太つたのであるから、かうしてリファインされた語の、わけても文化的の語の、この四五百年間に、諸方言に夥しく輸入したことは、爭ふべからざる事實である。今一つ、古來唯一の貿易港であつた那覇の方言が、中古以來輸入された大和言葉を咀嚼して、首里語に貢いだことなども頭に入れて置く必要がある。勿論文語は文學を通じて直接「首里親國」に這入つたと思ふが、實用的の國語は、まづこの「黄金口」(那覇港を歌つたオモロに見えてゐる。口は入口又は通路の義で、那覇の沖には、「波下の干瀬」即ち暗礁の間に、大和口と宮古口とがある)を通過して這入つたと見て、大過なからう。

次に、國語の輸入された經緯について少しく述べて見たい。鎌倉時代から室町時代にかけて、大和及び筑紫との交通が頻繁であつて、日本文化の南漸したことは、琉球史及び神歌オモロの語る所であるが、正徳三年(西暦一七一三年)、了道・際外・薗田等の僧侶によつて編纂された、諸寺重修記並造改僧緣由記」に中央集權直後の王尙清時代の圓覺寺(王家の菩提寺で、京都の南禪寺第四十六世の法燈を嗣いだ椿庭海壽の法嗣にして、古林五世の孫に當る芥隱の

建立にかゝる)の住職中に、五山の僧が一二三人もあり、しかも同書に、「由五山之住例云々」の文句があるのを見ても、思半ばに過ぐるものがあらう。因に言ふ。室町時代の初期頃、日本僧によつて首里那覇に眞言の寺院が、いくつか建立されたが、同時に神道も亦輸入された。なほ又第二尚氏の勃興當時から島津氏の琉球入迄の五代の間に、一代に二三回薩摩に派遣された使節のいづれもが、僧侶であつたのも注目に値ひする。彼等の多くは數年若しくは十數年も日本に留學した者だから、日本文化の輸入者であつたことはいふまでも無く、鈔物等に出てゐる室町時代の國語で、日本々土ではとうの昔廢語となつたものが、今尚南島諸方言で使用されてゐるのは、彼等によつて輸入されたものであらう。といふのは、その頃彼等の漢學が、明の洪永間に歸化して、琉球の教權を握つてゐた唐榮士民(久米村人)のそれを壓倒して、和訓が棒讀みに取つて代つたからだ。其處には又是より先、日本の爲政者や記錄家の知らぬ間に、七島灘を越えて移住した千秋萬歳を祝する下級宗教家の群もあつた。彼等の子孫は萬歳又は行脚といつて、首里市郊外の安仁屋(あんにや)といふ部落に住してゐるが、俗に京太郎(チョンダラー)と呼ばれてゐる。行脚(あんぎゃ)は後にアンヂャに轉じ、ヤンヂャと訛り、その對語萬歳(まんざい)の類推でヤンザイになつたが、更にヤンザヤーとなつて賤民といふ言語情調を伴ふに至つた。彼等は半世紀前までは、春の初に家々を訪れて、人形を舞はしたり、狂言もどきを演じたりしてゐたから、その詞曲集中の大和言葉の、漸次琉球語中に取入れられたことも考へられ得ることである。その他室町時代の末頃にはこれらの外に、日本の儒者・僧侶・茶坊主及び商人等の渡海する者が多く、那覇市の舊家の家譜を調べて見ると、歸化した者の少くなかつたことも知れるから、彼等の言語はもとより、彼等の民間傳承や俚歌童謡等の輸入されたことも、推測するに難くない。試みに、その一例を擧げてみよう。

雜誌「方言」（第一卷第三號）所載柳田國男先生の「音訛事象の考察」中に、蟷螂の方言西何(ニドッチ)・ニシャドッコ・西向け東向け等は、殆ど全國的に分布して居て、元はこの遲鈍な動物に向つて、京の方角を尋ねた子供遊びの名殘だと考へられる、といふことが見えてゐるが、西何(ニシドッチ)に相當する琉球語の to: ja: ma: も、この種の小蟲に向つて唐の方角を尋ねた子供遊びの名殘で、しかも那覇市には、その時に唱へる童謠

to: ja ma: ga? to: ja: ma:!

jamato: ma: ga? jamama: ja!

が遺つてゐる。これには、唐は何方だ。トーヤーマー、日本(やまと)は何方だ、ヤママーヤー、といふ程の意味があつて、上の句を誦ひ終ると、すぐ支那の方角に向き、下の句を誦ひ終ると、すぐ又日本の方角に向く、といつた調子で、この小動物が、如何にもこちらの問ひに應へてくれるらしいところを興がつたのである。to: ja ma: ga?（唐は何方(どっち)か）は、疑問詞の ga を略して、to: ja ma: ?（唐は何方(どっち)）ともいふから、これがやがて to: ja: ma: に轉じて、その名稱になつたに違ひない。だが、jamama: ja: は、jamato: ma: ga?（日本は何方(どっち)か）を承けて、頭韻法(アリタレーション)にする爲に出來た、意味のない音群で、山猫(ヤマヤー)を聯想させるものだが、to: ja: ma: の同義語として、口語中に存在してゐるのではない。to: ja: ma: なる語は、那覇を中心として南部沖繩即ち島尻中頭の二郡に分布してゐるが、その語源は殆ど忘れられて居る。北部沖繩即ち國頭郡の方言では、to: da: ga・又はさういつたやうな形となつて分布してゐるが、これにも唐は何方(どっち)かの義があつて、その意義が一般に能く知られてゐる。そこには童謠に iri da: ga: といふ句も遺つてゐるが、これは西何方(ニシドッチ)の義で、古形の名殘であらう。多分例の歸化人達に將來され、那覇を中心として、漸次全島にひ

ろがつたのだが、明初以來支那に興味を有ち、支那を崇拜するやうになつた國柄だけに、いつしか唐が西にすげ替へられたに違ひない。これについて宮古八重山及び奄美大島はどうかと調べて見ると、これに關する子供遊びはあるが、唐は何方(どっち)といつたやうなこの小蟲の名稱が更にない。兎に角、これに似た例はなほいくつかあるが、この語の如きは單なる言葉の輸入だけでは無く、子供遊びや童謠に附帶して輸入された歴史附きのものだから、比較的確實性を有するもので、日本文化南漸史の好資料となるに違ひない。くはしくは、「蟷螂の琉球語」（室町期の國語の南島方言に及ぼせる影響の瞥見）といふ形式で、藤岡博士還暦紀念論文集に出させて頂くことにしたから、御一讀を願ひたい。

七

最後に、語法について述べなければならないが、豫定の紙數がもういくらも殘つてゐないから、動詞の活用について、極めて主要な點だけを述べることにする。便宜上、南島諸方言の「取る」といふ動詞の活用を表にして、國語と比較して見よう。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
國語	tora	tori	toru	toru	tore	tore
沖繩	tura	tuji	tujun	tujuru	turi	turi

宮古	tura	turi	tutum	tutu	turi	turi
八重山	tura	turi	turun	turu	turi	turi
沖永良部	tura	tuji	tujun	tujunu	turi	turi
大島	tura	turi	turjuri	turjun	turi	turi
鬼界	tura	tuji	tujuji	tujun	'turi	turi

沖繩は首里市、宮古は平良町、八重山は石垣町、沖永良部は和泊、大島は加計呂麻島芝、鬼界は早町で、沖永良部・鬼界を除くの外は、日露戰役頃大學在學中に調査したものである。音韻組織の點で、沖繩・沖永良部・鬼界の三方言が同一であることは、最初に述べて置いたが、右の表でも知れる如く、沖永良部は奄美大島諸島中、沖繩に最接近してゐる爲に、語法の點でも七八分通り、沖繩と共通してゐるといつて差支なく、鬼界島は沖繩島を遠く離れて、大島と接觸してゐる爲に、語法の點では却つて大島方言に類似してゐるといつていゝ。人或は南島の中で鬼界島が九州に最近いのを見て、その方言が一等日本化してゐる、と考へるかも知れぬが、讀者もし私が雜誌「島」に出した「東風と死人の頭痛」一篇を一讀されたら、そして近い中に公にされる岩倉市郎君の『鬼界島の方言集』を披かれるならば、その餘りに琉球的なるに一驚を吃するであらう。陸續きなら兎も角、「水に分かされて」ゐる邊に、九州語と南島語との境

界線を見つけようとする人は、必ずや徒勞に終るに違ひない。言ふまでもなく、南島人は根本的には同種で、共通の民俗言語を有してはゐるが、後世沖繩島の搾取階級を中心として發達した、所謂琉球文化の影響を受ける度合に、交渉の親疎によつて、自ら濃淡の別のあることを知らなければならない。三百年間も沖繩と道づれをして來た大島諸島(琉球人が大和旅に上る途中に棊布してゐるので、「道の島」ともいふ)が、慶長役後間も無く島津氏の直轄になつて、それから三百年も經過してゐるに拘らず、絕えず琉球王國の治下で育まれた宮古八重山諸島(遠く離れてゐるので、先島の名を得た)よりも、いまだにより琉球的であるのは、注意すべきことである。これは祭祀に關する民俗及び方言を比較研究したら能くわかる。だから、奄美大島が琉球文化傳播に目安であり、琉球の事物で、慶長役以前のものであるか、それ以後のものであるかを判斷すべき目印であるならば、兩先島は琉球文化を組成した基礎的素材と同種類のものを陳列した古物博物館ともいへよう。

話は前に戻つて、再び動詞の活用のことになるが、最も注意すべきは、終止形が沖永良部以南で〔n〕又は〔m〕であるに對して、その以北では〔ri〕又は〔ji〕であることである。〔n〕の前身が〔m〕で、その前身が mu であることは、オモロに「おわちやむ」(來ませり)、「かいおとちやむ」(落して了つた)と出てゐることや、中山傳信錄の琉球語に、「看を妙母(mia-umu 卽ち mju:m)と音譯したのでも明白で、これについての Chamberlain の假定說は確實になるわけである。今日の首里方言では、「見る」は nu:n になつてゐるが、かつて mju:n であつたことは、時偶戲曲や短歌などに見えてゐるので知れる。だから終止形の語尾の〔n〕は、古くは mu であつたのが、母音の脫落で、宮古方言の如く〔m〕となり、いつしか〔n〕に變じたと見てい〻。(「見て見ろ」といふことには、ntʃi ma: といふが、この ma: には見よ卽試

みよの義がある。)そしてこの〔m〕は、Chamberlain も氣がついてゐた如く、動詞を疑問形にする時に復活して來る。turan(取らぬ)を疑問形にする時は、turami? になるが、tujun（取る）を疑問形にする時には、tujumi? になる。これも終止形の語尾の〔n〕がかつて〔m〕であつたよい證據である。これで、mi は疑問辭で無く、〔i〕の疑問辭であることも、明かになつて來る。序に疑問辭のことに一寸觸れて置きたい。オモロに、「首里杜城、今日は何がしようらしよ」（何をかすらむ）、あまへど(歡喜をぞ)、いちよなしやど(多忙をぞ)、しようらい゜(すらむ哉)」といふのがある。前半は「何」を作ふ疑問形で、疑問辭は「が」になつてゐるが、後半は、「何」を作はないので、「い」(ji)になつてゐる。この「い」は也行の「え」が、エ列がイ列と合併した爲に〔ji〕になつたものである。「え」の假字は、オモロには二つしか現れず、その代りに「ゑ」が使はれてゐるが、「い」は之をあらはしたものと思はれる。「しようらい゜」は現今の口語に直すと、ʃura jaː になるから、その「い」は ja→jo→ji と變遷して來たものに違ひない。これは否定の場合の疑問形には、はつきりあらはれてゐる。「なさのたゞみきよ(神人の稱)が、おわるでて(在すとて)、しらにや(知ずや)」の ʃiranja が、ʃiran (知らず)に〔ja〕の附いたものであることは、一見して知れる。現今韻文などの場合では、「行かずや」を意味する「いかね゜」は ikani? と讀んでゐるが、これは「行からもいを」を意味する ikani と斷然區別して發音されなければならない。「行きゆめ゜」は itʃumi? と發音するが、この場合エ列から來た mi とイ列の mi とは、全く重なり合つて、兩先島や大島の方言にあるやうな區別は出來なくなつてゐる。この〔i〕が〔ji〕の融合して、インフレクションのやうになつたといふことには、外にも證據がある。taru : ji? （太郎歟)の如く長母音の下につく時には、奇麗に離れて原形を見せてゐるが、これを taru : jami? （太郎なりや）といふ言表し方にすると、完全に融合して了つて、原形は捕捉しにく

くなる。語音翻譯に、儞的父親有麼を우라아샤아리と音譯してあるが、これは ura aʃa ari:ʔ と發音したに相違なく、これで四百三十年前には、琉球語の「有り」の終止形が國語の文語と同樣であつたことも知れる。これはあとで述べる。なほこの疑問形を他の方言と比較すると、もつとはつきりして來る。沖永良部・大島・鬼界の三方言では、「有りや」は annjaʔ で、オモロと等しく、德之島の方言では anse:ʔ になつてゐるが、これもつまりは、大島などのゝと同樣だといへる。たゞ一つ違つてゐるのは、八重山方言の anʔ で、語尾の調子を高めて、終止形と區別してゐることである。沖永良部以南の終止形の語尾〔n〕のことは、あらまし說明したから、次にはその北方の國語の「有り型」と同樣な〔ri〕〔ji〕について述べなければならない。これは恐らくこの「有り」型の類推で、あらゆる動詞(形容詞も)が統一されたのではあるまいか。私は華夷譯語の琉球語に、「有」を阿立(ari)と音譯してあるのを見て、五六百年前には、今の an が ari であつたことを知り、ことによると、國語の文語風に譯したものではないかとも思つたが、それより百年後の語音翻譯にも、「酒有」を사키아리(saki ari)と音譯し、「有麼」いふ疑問形を아리(ari:ʔ)と音譯したのが四つも出てゐるのを見、又それが奄美大島の三方言にあることを思出して、その頃までは、沖繩方言にも、この古形が遺つてゐたに違ひない、と考へ直すやうになつた。オモロその他の古典には、この存在動詞以外には、この形が見出せないから、多分殆どあらゆる動詞の終止形の語尾が、〔m〕又は〔n〕を取るやうになつた後までも、この動詞が統一されずに、特立してゐたと見なければなるまい。それはこの動詞と對になつて、每日每時間使用される「無し」を意味する語が、華夷譯語に乃(nai)と音譯され、語音翻譯に내(ne:)と音譯されてゐるのでも領かれよう。なほそれについては、ne: が後世絕對多數の動詞(形容詞も)の形式に統一されて、語尾に〔n〕を取るやう

になつた經緯を考へて見る必要がある。ne:n(無い)の古形は naimu で、短歌や戯曲などでは、「ないぬ」と表記し、北部沖繩の方言には、ne:nu といふ形で保存されてゐる。一寸 ne:n の形を見ただけでは、an の類推で、さうなつたやうにも思はれるが、之を疑問形にする時、ne:ni? になるから、この〔n〕は nu で、aran（有らず）などの類推で附いたことが知れる。これは他の方言でも殆ど同樣で、所謂二重打消である。いつ頃さうなつたかは判然しないが、この邊の消息を窺ふ前に、八重山方言で、この語がどういふ形になつてゐるかを一瞥してみよう。同方言では、沖繩方言の長母音の〔e:〕は、殆どすべて二重母音の〔ai〕になつてゐて、古形を保存してゐるのに、この語に限つて、ne:nu（その複合語は ne:n naʃun 無くする、ne:n narun 無くなる）となつて、新しい形になつてゐるのは、沖繩方言の二重母音が長母音に變つた後に、ne:n の輸入されたことを語つてゐるのであらう。華夷譯語や語音翻譯を見ると、十五世紀の初葉から十六世紀の初葉までの一世紀間は、nai の語尾に〔n〕はまだ附いてゐなかつたやうに思はれる。それから、nai の前身のどんなものであつたかについて、文獻は何も語つてゐないが、今日の口語中には、かなりその痕跡が殘つてゐる。國語の「びなし」「いとなし」に相當する binasa、itʃunaʃa 等の複合語の nasa が即ちそれで、それに an（有り）が附き、後に〔a〕が落ちて、動詞の終止形と調子を合したが、疑問形になる場合にも、binasami？ itʃunaʃami? になつた。nasa はもと國語の「無し」と同義で用ゐられたが、その sa は今では語源が全く忘れられて、一般形容詞の語尾と同じもの丶やうに考へられてゐる。かつて「無し」の用ゐられた痕跡も、jukuji naʃi（行衛不明）、sata naʃi（沙汰なし）、kami:naʃi（おかまひ無し）などに殘つてゐるが、これはいまだに終止形の氣持で使はれてゐる。それから國頭郡の今歸仁方言では、「からつぽだ」といふことを na:ʃi といつてゐるとのことである。オモロに、

「きこゑ國直（くになほり）、入りて水乞へば、水無きゃん眞神酒（まみき）出す（いちや）眞國（まくに）、とよむ國眞（くになほり）」とあるが、その「無きやん」は「無い」の義で、九州方言の「なか」が轉訛して、〔n〕を取つたものである。この〔n〕が否定辭の〔n〕であるか、それとも an（有り）の〔n〕であるか、その邊は判斷に苦しむが、兎に角借用語を早速自家の形式に直して使つたことがわかる。この語は又金石文中にも見出される。明の嘉靖二十二年（西暦一五四三年）に建てられた「やらざもり城」の倭寇碑中に、「むかしからかぢよくいくさのきやることはなきやものやれども云々」と見えてゐるが、昔から海賊外寇の來たりしこと無しといへども、の意で、「なきや」は「なか」の轉訛したものである。この語も亦、鎌倉期から室町期にかけて、日琉の交渉のあつたことを語る好資料である。それから、國語の「なし」は鎌倉期に「ない」に變じて、室町期以後勢力を得たといはれてゐるが、十五世紀の初葉、既に琉球語で用ゐられてゐたことは、華夷譯語を見てもわかるが、この語は、夙に在來の nasa を征服したに違ひない。この新來語は、その後も暫らく他の動詞形容詞に同化しなかつたが、いつまでも孤立してゐるわけにはいかないので、とう〳〵否定形の動詞の類推で〔nu〕を取り、〔nu〕が〔n〕に變つた時、あらゆる用言と道づれをすることが出來た。だが、加計呂麻島の方言では、いまだに ne: と nen とが並行してゐる。ne:n の同義語に、ne: ran といふのもあるが、これは aran（あらず）の類推で出來たもので、多分 ne:n よりは後に出たものであらう。中山傳信錄に、「無」を個嫩（ne:ran）と音譯してゐるのを見ると、一七二〇年までは辿れるが、恐らくもつと古くから行はれてゐたに違ひない。だが、「ない」はオモロや金石文には一つも見出せない。「ない」の前身「ず」も亦華夷譯語に、「不知道、失鑑子（シラズ）」と出てゐるが、オモロにも「おもひかけず首里（しより）赤頭（あくかべい）行きやて」と見えてゐる。この「おもひかけず」は、今では轉訛して、umintʃakiran になつてゐる。「ず」は又 uma: dzi-Fura: dzi（思はず知らず）とい

ふ疊語法にも現はれてゐる。老人たちは、能く taradzi ʃo:n といふ言葉を使ふが、直譯すると足らずしてゐるで、もつと喰べたいと思つてゐるの意である。この「ず」が原始國語より讓り受けたものであるか、後世になつて國語から借用したのであるかは、判然しない。

以上述べたことで、琉球語にも古來類推は盛に行はれて、その動詞の活用の形式を整理し統一したことが知れる。その動詞の活用が、國語の四段活用や良行變格に似て、至つて單純なのを見て、國語の原形動詞もこんなものではなかつたかと考へる人もあるが、これなどもことによると、その母音同樣に、古くは複雜であつたものが、例の類推作用で、段々統一されて、いつしか簡單化されたものではあるまいか。早い話が、九州方言では、「受く」「受く」るといつたやうに、今尙古形を保存してゐるのに、琉球語は殆ど國語の口語同樣に、それが ukijun・ukijuru となつてゐることで、國語よりも一足先に進化してゐることだ。國語では佐行變格のせ(將然)・し(連用)・す(終止)・する(連體)・すれ(已然)・せよ(命令)が、近代に至り、し(將然)・し(連用)・す(終止)・する(連體)・すれ(已然)・しよ(命令)と變じて、上二段活用となつたのに、琉球語では、これが盛岡方言などのやうに、とうに sa(將然)・ʃi(連用)・ʃun(終止)・ʃuru(連體)・si(已然)・ssi(命令)となつてゐる。(已然命令二形の母音は、〔e〕が〔i〕に合併した爲に、〔i〕になつたので、韻文などには「せ」になつてゐるから、元來は四段活用である。)オモロにも、「いやりさ」(言傳せむ)、「おもろする大や」(オモロを作る大人)などの用語例があるから、四五百年前旣にこの形の出來てゐたことがわかるが、オモロには又「お迎へせらまい」などの用例もあるから、前者が、最古の形だとは思へない。中には「忘る」「忘るゝ」の如く、wasira(將然)・wasi:(連用)・wasijun(終止)・wasiyuru(連體)・wasiri(已然)・wasiri(命令)といつたやうに、

古形を保存してゐるのもある。（連用形の wasi: は wasiji （wasiri が古形）の轉訛で、已然命令二形の wasiri は wasure の轉訛したものである。（八重山方言では、wasijun は basukirun に訛つてゐる。）「立つ」などは、tata（將然）・tatʃi（連用）・tatʃun（終止）・taturu（連體）・tati（已然）・tati（命令）と活用してゐるが、tatu kata（立つ所）・tatu na tatʃun（立ちに立つの義で、何か急用があつて或所と往復するにいふ）の tatu には、原始國語の俤を垣間見ることは出來よう。けれども琉球語が分立してから、ずつと孤立してゐるなら、ともかく、各時代の國語の影響を絶えず受けてゐるのだから、その動詞の活用に、祖語の生き姿を見ようとするのは、頗る困難な業であらう。なるほど Chamberlain が琉球語によつて說明した原始國語の動詞活用一元論はその祖述者を感歎させてゐるが、例の原始國語三母音說に動搖を來たした今日、決して安定な位地に在るとは言へまい。

終りに、琉球語の呼應法のことに言及して、この稿を結ばう。前にも述べた如く、琉球語の原始日本語から分立したごとは、推測するに難くないが、そこにはなほいくつかの解きにくい謎が殘されてゐる。萬葉時代には、「玉の緒」の說の如くには規則正しからずして、古今時代に至つて、「玉の緒」の理想とする如くになつたといふ、係結そつくりの語法が見出されるのは、その一例である。

琉球語の係結も、國語のそれと等しく、〔ja〕〔ga〕〔nu〕の格助詞を受けて終止形で結ぶのと、「ぞ」に相當する〔du〕を受けて、連體形で結ぶのと、「こそ」に相當する「す」又は「しよ」を受けて、已然形で結ぶのとの三種があつて、前の二つは今なほどの方言でも、規則正しく使はれてゐるが、後者はオモロ中に見出されるのみで、十六世紀頃の金石文中にも見出すことが出來ない。こゝでは專ら後の一つについて述べることにする。試みに一二の例を擧げて見ると、「天が下國

のかず大ぬしす世知らめ」「きこゑ君がなし島襲てちよわれ、ゑぞこ(大船)通わぎやめ(通はむ限り)あぢおそい(我君)しよ世知りよわれ(うしはき給へ)」の如きものである。古今時代に至つて整頓した呼應そつくりの語法が、かうして鎌倉期から室町期にかけて歌はれた神歌に現れたのは、一體どう說明したらいゝか。國語の搖籃期に手を別つた二つの姉妹語は、長い世代の間に、別々に發達を遂げたが、琉球語の環境も國語のそれと略〻似通つてゐた爲に、發達の結果は偶然一致するやうになつた、と「偶然」を考へてよからうか。交通の結果鎌倉期以後の國語の影響と見られないこともないが、單語の借用ならまだしも、係結の如き語法の借用に至つては、單なる文化の交渉といふだけでは說明することが出來ない。この說明には中古に於ける移住者の群が、政治的社會的に勢力を得た結果起つた現象だ、と見るのが妥當であらう。といふのは、琉球史にも、又重なる島々の傳承にも、それがほの見えてゐるからだ。しかもこの語法は、首里及びうらおそひのオモロに多く現れて、邊鄙な地方のには、稀にしか現れてゐないからだ。二百年前の琉球の文藝復興期に、初めて琉球語で戯曲を作つた玉城朝薫は、執心鐘入(道成寺を飜案したもの)の女主人公の詞中に、「約束の御行合や實にすまた爲ちやれ、袖の振合せど御縁さらめ」とこの古い語法を用ゐた。これは、世の常のあひびきは、なるほど誰もやることだが、かうして行きずりにあつて、陷つた戀こそは、因緣といふものであらう、といふ程の意である。この語法は時偶短歌にも現れてゐるが「だんじよ嘉例吉や選でさし召しやいる」(げにこそ緣喜のいゝ旅には、特に人を選んでお遣はしになることよ)とか、「名護の番所だんじよ鳴響まれる」とかいつたやうに、連體形で結んである。「だんじよ」は「だにす」(實にこそ)の轉訛したもので、現今の口語にも、dandʒu 又は dandʒuka(なるほど又は案の條の義)といふ形となつて遺つてゐるから、韻文で用ゐられたばかりでなく、古くこの語法

が口語でも使はれてゐたことは推測するに難くない。
兎に角、琉球語は文化的には國語に劣る所から、過去に於ても絶えず國語を借用してゐたことは、今まで述べた通りだが、明治文化の南漸以來、その夥しい借財の爲に、今や將に破產に瀕してゐるといふ狀態にある。混効驗集の序に、島津氏の琉球入後一世紀にして、「みせゝるの言葉」(古代琉球語)が消滅したので、三代に歴仕した老女官に質して、同集を編纂した、といつたやうなことが見えてゐるが、明治十三年以後の琉球語の變化には、それよりも大なるものがあつて、恐らく過去の二三世紀間の變化にも匹敵すべきものがあらう。半世紀前までは、日本語が話せるといふことは、今日、英語が話せるといふ位に誇りであつたが、國語教育が普及した現今では、琉球語を操るのが、むしろ恥辱と思はれる迄に世相が變り、どんな寒村僻地にいつても、標準日本語の通じない所がなく、琉球語の單語は國語のそれにすげかへられ、その音韻語法さては言廻しまで、國語的になつて了つた。かうして輸入された語彙の歴史に暗い若い人達は、自分等の言葉を昔ながらの琉球語のやうに考へてゐるが、八十臺の老人達が、今の若い者どうしの話は、沖繩口(うちなーぐち)らしいが、自分達には能く聞き取れないと言つてゐるほど、彼等の琉球語は變化してゐる。琉球語がかうして「言靈」を失ひつゝあるのは、悲しいことだが、勢ひだから仕方がない。アクセントだけを殘して、全部標準語にすげかへられる時代も、遠くはあるまい。だから、南島の方言採訪家は、その採集帖に、一語一語の履歴を書入れて、學界に提供することを忘れてはならない。なるほど琉球語の現狀を知るには、これを拔きにした語彙でも間に合ふが、それ以前のことに論及しようとする人は、親しく三十六島を訪れて、生きた古典達が「にらいかない」に旅立たない中に、彼等の語彙を採錄すべきである。兎に角、今の世に「無下の事を仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴

聞を待つものかは、我も死に、聖もうせなば、尋ね聞きてむや。」と言捨てて、渡邊の聖の許へ走つた、登蓮法師のやうな人が少いのは、嘆はしいことである。(了)

昭和八年十一月二十五日印刷
昭和八年十一月三十日發行

國語科學講座（第五回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院